

信じることと疑うこと

教会は神様を信じる人の集まりです。では、信じるって何でしょう？どんなことがあっても神様を信じる気持ちが揺らがないことでしょうか？それだったら、神様を疑ってしまう人は信仰がないということで、ダメということになってしまうのでしょうか？実は私はそうは思っていないのです。今日は聖書を通して、こうしたことをしっかりと考えていきましょう。

さて、さっき読んでもらった聖書箇所は、マルコによる福音書9：14～29です。このお話、私たちが持っている聖書では、「汚れた霊に取りつかれた子をいやす」と小見出しがつけられています。ここから分かるように、このお話はイエス様が「汚れた霊に取りつかれた子」を癒して、苦しんでいた親子を救うお話なんですね。

このお話の中に登場する息子は、幼い頃からものも言えず、耳も聞こえず、何度も引きつけを起こして地面をのたうちまわっては火の中や水の中に飛び込んでしまうという状態でした。このような息子を何とかして救おうと、父親は自分にできる精一杯のことをしてきたことでしょう。それでも、息子の状態は一向に良くなりませんでした。さらに悪いことに、科学が発達していなかった当時、こうした病気は「汚れた霊」、「悪霊」が取り憑いて起こるといふふう信じられていたのです。それでこの親子は、周りから厳しい差別の目で見られていました。

22節で父親はイエス様にこう言っています。「わたしどもを（わたしども親子を）憐れんでお助けください」と。ここから息子だけでなく、父親もぼろぼろになっていたことが分かります。方々手を尽くしたけれどもことごとくだめだった、その絶望感。また少しも目を離すことができない壮絶な看病の疲れ、周りの差別。そうしたことが息子のみならず、父親をもぼろぼろにしていたのです。

こうした中で、父親はなおイエス様の力を信じる思いからお弟子さんたちにしがみ

つきました。その結果はどうだったのでしょうか。ちょうど私たちがこうであって欲しいと神様に祈っても、実際はその通りにいてくれないということがたくさんあるように、だめだったんですね。この父親が期待していた通りにはなりません。ですから、イエス様御自身が「その子をわたしのところに連れて来なさい」と言われても、父親はなおもイエス様を信じて委ねることができませんでした。「おできになるなら、お助けください」と言うのが精一杯だったんです。これに対してイエス様は、『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」と仰います。そしてその言葉を聞いて、父親はすぐに「信じます。信仰のない私をお助けください」と叫ぶのです。そしてこの叫びに応じて、イエス様は息子の病気を癒されました。

皆さんはこのお話を読んで、どんな風に思いますか？「やっぱり疑ったらだめなんだ。イエス様に怒られるんだ」と思うのでしょうか。でも、私は今日のお話をそういう風に読んではいないんです。『できれば』と言うか」とイエス様に言われて、父親は決して「ああ、ごめんなさい。自分はもう疑いません。完全にあなたを信じます」と叫んだわけではありませんでした。そうではなくて、彼は「信じます。信仰のない私をお助けください」と叫んだのです。

この「信じます。信仰のない私を」という言葉。言葉の上では完全に矛盾しています。でも私はこれこそ、どうやっても信じることができない、神様に対する疑いを払えない者が、なおもイエス様に助けられて本当に信じる者とされることを願う嘘偽りのない正直な信仰の叫びだったと思うのです。そして父親のこの叫びに応じて、イエス様は息子の病気を癒されたのでした。

今日の聖書箇所描かれている父親の姿は、私たちの姿でもあります。私たちは一人一人、信仰においてしばしば揺れ動く不完全な存在ですけれども、そこから目を逸らすことなく、不完全な自分を受け入れてなお神様に願い求める者を、神様は決してお見捨てになりません。

イエス様は『できれば』と言うか」と仰られたましたが、それは決して「疑うな」ということではなく、自分の中にある疑いの気持ちに正直に向き合ってなお御自分のもとへと進み来なさいという招きの言葉なんですね。

皆さんの中にはもしかすると信じることと疑うこととを、互いに相容れないものとして捉えている方もおられるかもしれません。そして、疑う気持ちが出てくれば、信仰者として失格なんだと思っておられるかもしれません。でも、信じることと疑うこととって、実は表と裏で表裏一体なんですね。疑う気持ちが出て来て、それにきちんと向き合うからこそ私たちは信仰が深まるんだと思います。

疑うことを許さない宗教って、とても危険ではないでしょうか。今はカルトという危険な宗教が問題になっていますが、カルトってそうなんですよね。疑うのは罪だとしてまったく許さない。そんな自由がない。そんな信仰はとても危険だし、不健全です。

皆さんも、特に子どもたちはこれからの長い人生の中で、神様、イエス様を信じられなくなってしまうような辛い経験もたくさんすることでしょう。その時はぜひ、その疑いの気持ちを無理に抑えようとするのではなく、大切にしてほしいと思います。そしてその疑いの気持ちを持ったまま、神様に、イエス様におすがりしてほしい、お委ねして欲しいと思います。その時、神様、イエス様は決して私たちをお見捨てになりません。

信仰というのは生涯を通して続いていくものですが、その中で神様を疑う気持ちが生じた時、私たちはより深い信仰へと神様に招かれているのだということを信じて、自分を偽ることなく、自分の中にある疑いの気持ちに素直に耳を傾けて行きましょう。そして神様のお導きの下、信仰を育まれる経験を皆で一緒にしていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——